

『祭のこと』

泉鏡花作

全一章

いまも中六番町の魚屋へ行つて歸つた、家内の話だが、其家の女房が負ぶをして居る、誕生を濟ましたばかりの嬰兒に「みいちちゃん、お祭は、――お祭は。」と聞くと、小指の先はどな、小さな鼻を撮んぢやあ、莞爾々々、鼻を撮んぢやあ莞爾々々する。

山王様のお渡りの、猿田彦命の面を覺えたのである。

それから、「お獅子は？ みいちちゃん。」と聞くと、引掛けて居る半纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。いや、お祭は嬉しいものだ。

――今日は梅雨の雨が、朝から降つて薄ら寒い。

潮は其の時々變るのであらうが、祭の夜は、思出  
しても、何年にも、いつも暗いやうに思はれる。時  
候が丁ど梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月  
ある頃でも、曇るのであらう。また、大通りの絹張  
の繪行燈、横町々々の紅い軒提灯も、祭禮の夜は暗  
の方が相應しい。月の紅提灯は納涼に成る。それか  
ら、空の冴えた萬燈は、霜のお會式を思はせる。

日中の暑さに、酒は浴びたり、血は煮える。御神  
輿かつぎは、人の氣競がもの凄しい。

五十人、八十人、百人、ひとかたまりの若い衆  
の顔は、目が据り、色は血走り、唇は青く成つて、  
前向き、横向き、うしろ向。一つにでつちて、葡萄  
の房に一粒づゝ目口鼻を描いたやうで、手足の筋は  
凌霄花の緋を欺く。

御神輿の柱のい飾の珊瑚がニと咲き、銀の鈴が鳴  
据つて、鳳凰の翼、鶏のとさかゞ颯と汗ばむと、彼  
方此方に揉む状は團扇の風、手の波に、ゆら／＼と  
乗つて揺れ、すらりと大地を斜に流るゝかとするれば、

千本の腕の帆柱に、衝と軒の上へまつすぐに舞上る。

わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もう此時は、人が御神輿を擔ぐのでない、龍頭また鷓首にして、碧丹、藍紅を彩れる樓船なす御神輿の方が、います靈とゝもに、人の波を思ふまゝ釣るのである。御神輿は行きたい方へ行き、めぐりた方へめぐる。殆ど人業間ではない。

三社様の御神輿が、芳原を渡つた時であつた。仲の町で、或引手茶屋の女房の、久しく煩つて居たのが、祭の景氣に漸と起きて、微に嬉しさうに、しかし悄乎と店先にゐんだ。

御神輿は、あらぬ向う側を練つて、振向きもしないで四五十間づゝと過ぎる。まく鹽も手に持つたのに、

あゝ、ながわづらひゆる店も寂れた、小兒の時から私も鼻屑、あちらでも御鼻

肩の御神輿も見棄てゝ行くか、と肩を落して、ほろりとしつゝ見送ると、地震が揺つて地が動き、町が此方へ傾いたやうに、わつと起る聲と齊しく、御神輿は大波を打つて、どどどと打つて返して、づしんと其處の縁臺に据つた。――其の縁臺がめり込んで、地が三尺ばかり掘下つたと言ふのである。女房は即座に癒えて、軒の花が輝いた。

揃の浴衣をはじめとして、提灯の張替へをお出し置き下さい、へい、頂きに出ました。えゝ、張替をお届け申します。――軒の花を掛けます、と入かはり立ちかはる、二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それも可い。テケテンテケテン、はや獅子が舞ひあるく。

お神樂囃子、踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの、人形、いけ花。造花は、櫻、牡丹、藤、つゝじ。いけ花は、あやめ、姫百合、青楓。

こゝに、おみき所と言ふのに、三寶を供へ、樽を

据ゑ、緋の毛氈に青竹の埒、高張提灯、弓張をおし  
重ねて、積上げたほど明々と、暑くたつて構はない。  
大火鉢に火がくわん／＼と熾つて鉄瓶が、いゝ心持  
にプツプツと湯氣を立てゝ居る。銅壺には銚子が並  
んで、中には泳ぐのがある。老舗の旦那、新店の若  
主人、番頭どん、小僧たちも。町内の若い衆が陣取  
つて、将棋をさす、碁を打つ。片手づまみの大皿の  
鮓は、鐵砲が銃口を揃へ、めざす敵の、山葵のきい  
た鮪いのはとくの昔討取られて、遠慮をした海鰻の  
甘いのが飴のやうに少々とろけて、蛤がはがれて居  
る。お定りの魚軒と言ふと、だいぶ水氣立つたとよ  
りは、汗を掻いて、角を落して、くた／＼と成つて、  
つまの新蓼、青紫蘇ばかり、濃い緑、紫に、凜然と  
立つた處は、何うやら晝間御神輿をかついだ時の、  
君たちの肉の形に似て居る。消防手御免  
よ。兄哥い怒るな。金屏風の鶴の前に、おかめ、ひ  
よつとこ、くりからもん／＼の膚ぬぎ、あぐら、中  
には素裸で居るではないか。其處が江戸だい。お祭  
だ。

わつしよい、わつしよい、わつしよい、こら

しよい、わつしよい、こらしよい、わつしよ／＼／  
！。

夜よが更ふけると、紅くれなゐの星ほしの流ながるゝやうに、町まち々の行あん  
燈どん、辻つじの萬燈まんどう、横町よこぢやうの提燈ちやうちんが、一ひとつ消きえ、二ふたつ消きえ、  
次第しだいに暗くらく更ふくるまゝに、やゝ近ちかき町まち、遠とほき辻つじに、  
近ちかきは低ひくく、遠とほきは高たかく、森もりあれば森もりに渡わたり、風かせあ  
れば風かせに乗のつて、小兒こどもまじりの聲こゑが、

よ、  
わつしよい／＼、わつしよい／＼、わつし  
よ、

わつしよ、わつしよ、　　ー　　わつしよ。

聲こゑある空そらは、ほんのりと夢ゆめのやうな雲くもに燈ともを包つん  
で動うごく。　　かゝる時とき、眷屬けんぞくたち三萬まん三千ぜんの  
お猿さるさんも遊あそぶのらしい。

わつしよ、わつしよ、  
わつしよ、わつしよ　　ー　　／＼／＼。

【完】